

---

# Why...

前田広大

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Why . . .

### 【Nコード】

N0052W

### 【作者名】

前田広大

### 【あらすじ】

以前書いた詩、『Why do it become it s  
o?』をもとにした、詩のような小説のようなもの。

『私』と『俺』と『僕』と…そして『あいつ』『あの人』の、終わりの見えない物語。

作者にあったことによる心境の変化など大きく出ますがフィクションです。

No.0

Why?

なぜ？

Why do it become it so?

なぜこうなってしまうんだろう。

私は、私は…

What?

どうしよう？

What shall I do?

どうすればいいんだ。

俺は、俺は…

When?

いつ？

When did I fall in love?

いつから『あの人』を好きになったのだろう。

僕は、僕は…

いったい、どこへ向かっているのだろう。

僕はきつと鈍感なんだ。

人の気持ちどころか、自分の気持ちさえわかっていない。

自分が、誰を好きなのか。自分が、ある相手をどう思っているのか。そして自分がなぜそんな行動をしてしまうのかさえ、わからなくな

る。

俺はきつと子供なんだ。自分の感情を素直に表せない。気になる女の子をいじめてしまう小学生の男子みたいに、まさにそのまま、同じ行動をとっている。…そういえば、最初は小学生だったけど。それから進歩していない。人によっては不器用だとか、素直になれないとか言われるけど、それは結局ガキなんだ。

私は、誰なんだろう。…問いかけたところで、答えが帰ってくるはずもない。もしそれがわかる者がいたとしたら、それは私自信。でもわからない。自分が誰なのかわからなくて、消えてしまいうので怖いんだ。私は、私を探している。

S t o r y i s n e v e r e n d . . .

No. 1

『あの人』は、気がついたらそこにいた。すぐそばに。簡単に手の届くようなところに。

僕はずっと、彼女と一緒にいたいと思っていた。彼女の笑顔を、いろんな表情を、ずっと見ていたいと思っていた。

でも僕は、その感情がなんなのか、ずっとわからなかったんだ。いや、少し離れてしまった今でも、わかっていないのかもしれない。

あいつと最初に出会ったとき。その元気な少年に、とても親近感を抱いた。

動き回るたびに汗が元気に輝き、笑顔が弾け。一瞬俺は変になってしまったんじゃないかと思った。

近づきたいと思った。暗い俺にその元気を分けてほしいと願った。あいつは、輝いていた。

ある日。色恋沙汰に目覚めだした同級生に、誰が好きなのかと聞かれたんだ。

僕は答えられなかった。自分で、誰が好きなのかわからなかったんだ。

そんなある日、ある幼なじみが言った。僕は『あの人』が好きなんだと。

そいつは、僕より僕のことを知っているんじゃないかと思う。

そして、僕はあの人を意識しだした。より一層、ずっと一緒にいたいと思うようになったんだ。

突然、あいつが女の子であると知った。俺の前で輝いていたあいつは女の子だった。かといって、あいつに惹かれたのは恋愛感情ではないだろうと思った。

ただ、あいつの輝きは、日増しに増していった。

あいつに、触れたいと思った。その時はなぜだかわからなかったけど、いや、今でもよくわからないけど、ただ無性にあいつに触れたかった。

私は、人の温もりが欲しかったのかもしれない。彼女に触れて、温もりを感じたかったのかもしれない。でも、私にそれは…

俺は、あいつに…あいつに、乱暴な触れ方しかできなかった。気を許した男友達にするような、手荒なスキンシップ。触れて、温もりを感じたいのに、そんな接し方しかできなかった。優しく抱き締めることは、出来なかった。

あいつのことが大好きなのに、それを表現できずに、素直に好意を伝えられずに、あいつに嫌われるような行動を続けてしまったんだ。

私は、ずっと。

優しい親と、生意気で喧嘩が絶えないけど根は優しい弟たちと、数人の仲のいい友達に囲まれて楽しく過ごしていた。うまくいかないこともたくさんあった、私を虐めるやつらもいた。でも楽しく過ごしていた。

でも。ずっと、足りないものがあつた。心の一部が、ずっと満たされないままだった。

私は、愛が欲しかったんだ。家族や友人からとは違う、異性からの愛が。私を愛してくれる人が欲しかった。私と一緒にいて、私の心の隙間を塞いでくれる人が欲しかったんだ。そして私も、その相手の心の隙間を塞げる存在でありたい。

お互いの足りないところを補いあって、ずっと一緒にいられる相手を探しているんだ。



僕は、『あの人』が好きだ。……誰よりも、好きなんだ。

今までもずっと一緒にいて、そしてこれからもずっと一緒にいたい。

願わくば、もっと近くで。

彼女の笑顔を、いろんな表情を、ずっと見ていたい。一緒に笑って泣いて、それぞれの足りないところを補いあって。そうやって一緒に生きていきたいと、初めて思った。

部活の1つ上の先輩がいて、彼はよく僕の相談に乗ってくれた。彼自身も、その時の僕は知らなかったけど、複雑な状況の中で悩みに押し潰されそうになっていたのに。

でも今は分かる。僕も、自分は悩みで押し潰されそうだけど誰かの悩みを聞きたい、力になりたいって思うから。

そして、僕の『あの人』に対する想いは強く、彼女なしではつらいくらいになっていった。

## No.5 (後書き)

話の順番は時系列通りそのままではないです。  
ただ『俺』と『僕』のそれぞれの話は現時点では1つづつの流れに  
なっています。

未来の事なんて、何もわからない。こうなればいいとか、ああしたいとか、いろいろな勝手に考えるけど、結局その通りにいく事なんかない。全て思った通りになるのは物語の中だけ。だから私は物語を読み、そして書く。でも自分がその中にいたいとは思わない。現実には思ったよりずっと面白い事にいつも向かっているから。自分が考えた希望のままじゃ、つまらないだろう？

僕の中の、『あの人』に近づきたいという思いは強くなり、抑えきれなくて、伝えようとした。あの人僕を好いてくれているような気がしていた。そして

俺はきつと、あいつから逃げようとしたんだ。自分の思いが自分ではよくわからないから、人がそうだと言っているほかに逃げようとした。そして、結局

答えなんて、どこにもない。

本当はないのか、見つかっていないだけなのかさえわからない。

私がとつた行動が正しかったのか、わからない。

正解の存在しない問題、正解がいくつもある問題、選択肢のなかに正解の含まれていない問題…

そんなものばかりだ。そしてその正解は発表されない。

あの時僕のとつた行動は正解だったのか。わからない。

あの人は、僕に正解を教えてくれなかった。

僕には推測しかできない。希望的観測を試みたり、それをすぐ打ち消したり。

答えが見えないまま、時間が過ぎて行く。

俺の行動が間違っていたことはわかりきってる。そしてまたチャンスを得て、また間違った選択肢を選んだ。

これで終わりなのか、終わっていないのか、わからない。

終わらせたいなら、そんな笑顔を俺に向けないでくれ。でも、

その笑顔が見られなかったら、俺はどうなるのだろう。

完全に失うのと、手の届かないそれを見続けるのと。

どちらも正解であって欲しくない。でも、そこにはもう、手は届かない。

俺は、失敗した。

失敗して、それでも諦めきれなくて。

もう一度チャンスをもたらえた気がして、ゆっくりと、近づこうとした。

そしてまた、失敗した。

向こうから、あいつのほうから、俺に近づこうとしてくれてる気がしたんだ。

あいつとの距離が縮まった気がして、しょっちゅう話せて、幸せでそんな時間がずっと続けばよかった。

でも俺は、また間違った選択肢を選んだ。

そのまま、その状況で十分に幸せだったのに。そのままでは、ずっとそのままではいられたかもしれないのに。

もっと近づきたいと、思ってしまったんだ。あいつもそう思ってるんじゃないかなんて、思い込んでしまったんだ。

あいつに想いを伝えて、ひたすら伝え続けた。

そして、あいつは離れていった。

それでもそれに気がつかずに、訴え続けた。

そして、拒絶された。

気がついたら、あいつを傷つけてしまっていたんだ。俺の勝手な思い込みで。

ただ大好きだったただけなのに、それを伝えたかったただけなのに。でも、それはあいつを傷つけるほどに暴走してしまっていた。

前兆はあった。でも俺は、それに気付けなかった。

だから、俺にとってはそれは突然だった。

突然、突きつけられた拒絶。突きつけられた辛い現実。それが、鋭い刃のように心を切り裂いた。

そして、あいつを傷つけてしまったという事実で、その傷は日を追うごとに深くなっていた。

それでも。

しばらく顔を合わせられず、再会した時。

あいつは俺に向かって微笑んだんだ。

私は、ある一つの事実からずっと目を背けようと、逃げようとしていた。

他の場所に、代わりを求め続けた。でも

その笑顔を見た瞬間、気づいてしまったんだ。

あいつを傷つけてしまい、拒絶され、諦めたつもりでいた。諦めようとした。

それは、出来なかった。

あいつの笑顔を見た瞬間に。やっぱりこいつじゃないと駄目なんだと気づいたんだ。

笑顔を、向けられたことで。

また、チャンスをもたらえたんじゃないかと思ってしまったんだ。

あの時突きつけられた事実で、それがありえないとわかっていたはずなのに。

それでも、期待してしまっただ。

そして、また俺は拒絶された。

私は、探しているんだ。  
私を愛してくれる誰かを。

私は、求めているんだ。  
私に向けられる、優しい愛を。

私は、恐れているんだ。  
自分から、特定の誰かを愛したいと願うことを。

私はずっと、愛してくれる誰かを、私に向けられる愛を、求めているのだろう。

かつての私は、誰かを好きになって。その相手を愛したい、その人に愛されたいと願っていた。  
時には、複数の相手を好きになってしまったんじゃないかと悩んだり。  
大好きな相手が自分をどう思っているのだろうかと思いを巡らせたりもした。

でも。

それは全て、叶うことはなかった。



そして、大好きな相手に拒絶されるという体験をして。自分から誰かを好きになること、自分から特定の誰かを愛したい、その人に愛されたいと願うことを、恐れるようになっていた。

それでも。

それでも私は、誰かに愛されたい。誰かの愛が欲しい。むしろそれは、特定の相手を思うことを恐れ、避けているからこそ、強くなった。

今の俺は、いつもいつも俺を好いてくれる女の子を探している気がする。

あいつに対しての思いが拒絶されて、それを代わりに向ける対象が欲しいのかもしれない。

それでも、拒絶は怖くて。自分から動くことは出来ない。

入試のときにすれ違って、なぜか顔を覚えていた隣のクラスの女の子とか。久しぶりに会った昔の同級生とか、中学の部活の後輩とか。同年代の異性であれば、誰でも意識してしまうかもしれない。そんな状態。

でも、誰に対しても自分からは動けない。

その何人も意識してしまう中の、特定の誰かが好きなんだと決めることもできない。

きつと心の奥で、それを避けているんだ。叶わなくて、もしかしたら拒絶されて、傷つくのを恐れているんだ。

.....  
おぼろげに待っている。

.....  
迷っているんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0052w/>

---

Why...

2011年10月5日19時39分発行